

《実践民俗学提唱第1弾》

旧製法による「紙漉き」の再現

記録作成（1971年12月－1972年2月）



記録作成：西中国山地民具を守る会

津和野藩時代の村々(米紙上納)



紙年貢の大福帳

天保九戌戌年三月五日

波江村御清中保人別帳

三浦泰一郎役中

天保九戌戌年正月

西谷村御清中保人別帳

三浦泰一郎役中

天保九戌戌年正月

東谷村御清中保人別帳

三浦泰一郎役中

紙の種類

- 地楮紙＝所持地に産出する楮で漉いた紙。上納し年貢米に代えるものも含む。
- 御買紙＝購入した楮で漉いた紙。元禄10年～
- 前銀返上紙＝1丸に付き銀40匁の紙を4年で返上する。
- 増御買紙＝1丸に付き代米1石の買上紙「米立御買紙」
- 御礼紙＝1丸に付き代米7斗
- 差上紙＝庄屋から御礼として献上する紙
- 働漉紙＝払勘定の際、前銀は「銀奉行所」から「御買紙」と同じ見取值段差引で銀が支払われる。
- 増働漉紙＝1丸に付き42匁
- 御趣段紙＝請紙以外拔荷防止に1丸に付き代米1石

中保と黄紙

- 中保紙とは、塵紙のことである。
- 黄紙とは、藩庁専用の「公用紙」であるため、一般には禁止されていた。宝暦12年(1762)虫害を防ぐために「黄檗皮」(キハダ)を漉き込んだ。特産品であった。

年貢立米の変動の推移

地楮紙1丸の推移

- 元禄5年(1692)5斗
- 元禄10年(1697)5斗8升
- 元禄16年(1703)6斗5升
- 宝永4年(1707)1匁目7斗
- 享保5年(1720)6斗5升
- 享保6年(1721)7斗7升(1丸19貫800匁)

※西方と奥部では1斗の相違があった。

田野尻蔵屋敷

- 享保16年(1731)4月から波佐・久佐・日貫組の紙年貢は、この蔵屋敷に津出しとした。
津とは、港のことで、山間部から港へ荷を出すことを「**津出し**」といった。
海岸部では、このことを「浜出し」といった。

半紙の運搬に使用する「紙負いこ」



紙の運搬には、
紙負いこで三締（六千枚）
を背負った。



半紙の運搬

左の図は、『紙漉重宝記』に記されている浜田藩内の浜出しの図である。

12kmの道のりを2往復することが分かる。

帰り便で、塩を運ぶことも記されている。



紙負いこ

嘉永6年(1853)の布達

家回り菜園場にも楮を植え付け、近所畑に苗床をこしらえ楮苗を多く作り植付け朝夕に手入れして良い苗を作ること。楮の間には麦、大豆。小豆を作ること。

楮の毛苗伏付けは時期を遅れず彼岸までに行い、霜除けとして刈り草を拡げること。

楮畑は新開、古畑共、人別に地名、面積、植付け数を詳細に記入して差し出すこと。

これによって、久佐組18カ村の毛苗本数140,7083本、石苗308,944本となった。毛苗で多いのは、波佐村の149,654本。石苗で多いのは、今福村32,400本である。

紙漉きの御達し

天明元年(1781)9月19日、各組から庄屋一名ずつ召し出され、「近年紙質が低下して、大坂での売り捌き安値が多くなったので、今後地楮を目高上質紙を漉き出す様に」と達せられた。

文化7年(1810)郡奉行からの達に「請紙漉方近年位劣り、大坂に於いても御売方にも相差し障り候・・・」。文化13年(1816)には、「一統心得宜しく出精致し候趣にて、大坂表にて御売払値段等もよろしく・・・」紙の質が向上したことを褒めている。

弘化2年(1845)10月、郡奉行から代官へ「村方では、蔵方、肝煎、組頭共も、役前のところを考え自分の受紙を厚手に漉き出し、見習わせる様申し達するよう」とある。

紙見取は、追々9月中より行われるので、秋上げを早く片付け楮蒸し、船立を早目にする事。

年内の漉立が延引しているので、不足紙は、大晦日までに庄屋所へ積込む様精出す事。

春紙で納付すれば大阪での都合よろしからず、暖水に向かつての漉立は紙の出来栄え悪く売り方へも響くので、この旨を心得年内に多く出紙する様心得る事。

御紙の位が劣っては大坂表の売捌が不利である。当年は楮作も宜しいので、上ヨ以上本印紙を漉立てるべく、又上ハ印の紙は出来よろしからずと聞くので、入念に漉くこと。

紙漉きの時節には、庄屋、役人は時々軒別に巡回して、紙漉所で指導する等心遣い精励すること。

これらの達に対して悪紙一件が内済みとなり、庄屋から代官に対しての申送状は、「悪紙20束本人に持たせ紙役人付添い出頭させましたからよろしく御取計らい願う」としている。

波佐村萬手鑑

文化11年(1814)に、半紙の請辻236丸54束、中保14丸と定まっていた。

この時代の波佐村の総戸数276軒。

本百姓137軒、小百姓42軒、百姓合計179軒。

これに対して紙漉き船の数は、179艘であった。

従って、全農家で紙漉きが行われていたということである。

請紙の上納期

三期に分けられていた。

年内割 23%

正月割 40%

4 月割 37%

この割り当てや徴収の世話役を
「紙役」と言った。

紙漉き船

嘉永4年(1851)に、庄屋、下役人においても紙漉き船が無くては、自然と役筋より触れの趣意も貫きかねるから、庄屋役人の内、紙漉き船の無い者は、今年船を造り、一統励み合って国産たる紙の増産をする様心配りをする事。新に船を造って紙漉きを始めた時は名前を申し出ること。

文化11年(1814)に179艘あったものが、明治4年(1871)には137艘と42艘が減少した。

※廃藩置県によって小百姓42軒が紙漉きから解放された。

紙漉きのこと

波佐の請紙高を消化するに
楮蒸しは、一日4～5釜が限度。1,500釜分
が必要。

一箇所ですと300日かかり、戸数別平均
に割れば一軒8釜となり、2日間かかります。
紙漉きは、一日400枚が限度とすれば、40
日間かかります。

浜田藩と紙漉きの歴史

慶安年中(1648-1654)頃から匹見郷の紙祖で始まった。

天明7年(1787)上本郷村で楮の植栽が始まった。

寛政12年(1800)頃、『紙漉き重宝記』の著者・国東治兵衛の奨励で大坂市場に問屋を設け、全国的に売捌いた。

その後、津和野藩の請紙制度を導入し、天保6年(1835)民間の自由販売を禁じて、全て藩の「御買上」による専売事業を導入した。

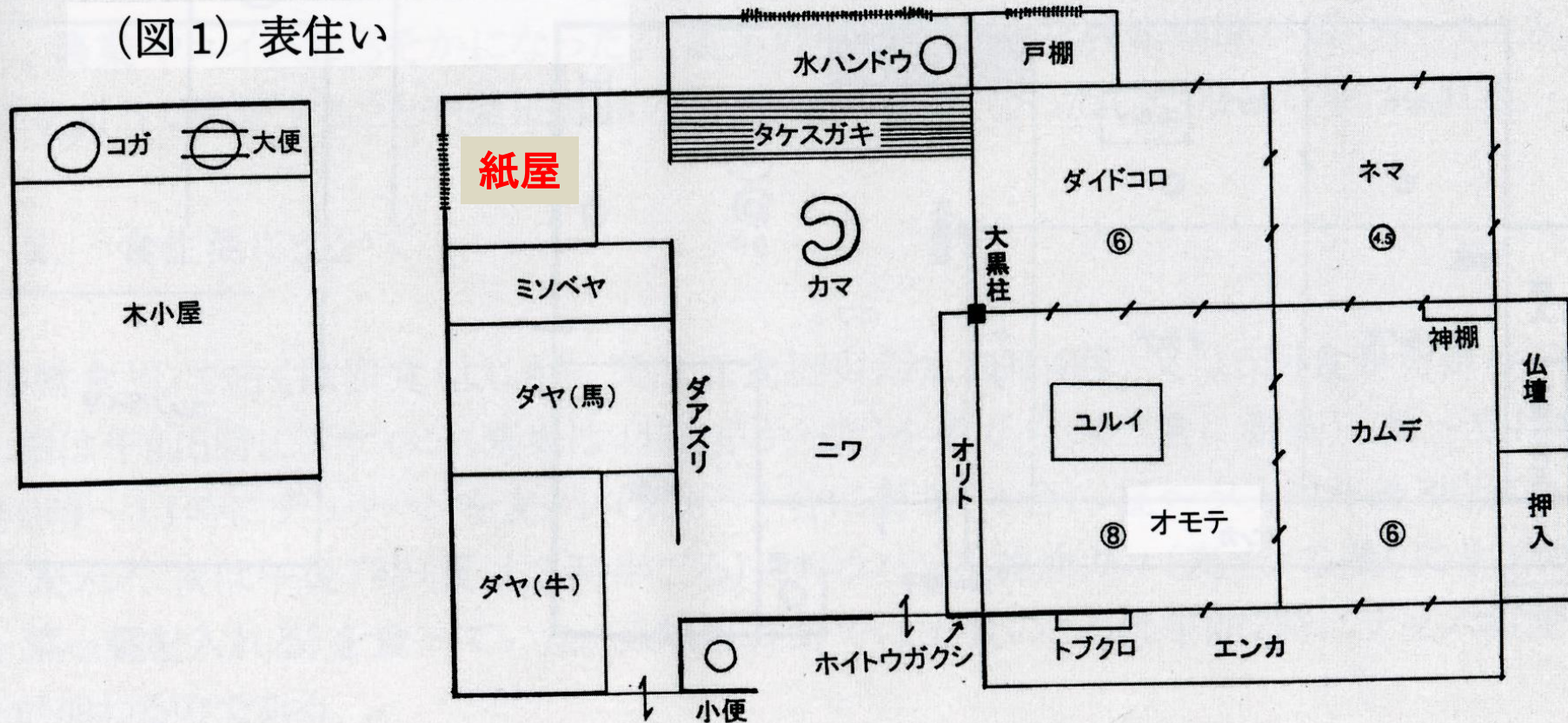
波佐の年中行事

月	日	行 事	仕 事
1	1	年始	いわざ作業
	7	七草かゆ	馬のくつ作り
		仕事始め	牛の追綱作り
	15	着初・搦初	男は日雇い作業
	15	「トロヘイ」	四八流し
	15	「もちがい」	山仕事
	15	「かがみびらき」	炭焼き
2	16	ごしょうき・ときの日	女は機織作業
	20	二十日正月	麻うみ
		大寒	つむじ作業 寒餅・寒味噌搗き
2	1	一日（ひてい）正月	いわざ作業
	3	節分詣で	草履作り
	9	初午詣で ことおえまつり はるまつり 旧正月	屋根普請用縄ない 春木を切る
3	21	お彼岸 すきぞめ（牛の使い始め）	しいら粉挽き（食用） 苗代の荒起し 接木（柿） 干かぶ作り いも類苗床作り
4	3	節句	接木（桃・梨・栗） よもぎつみ にどいも植付 苗代作り わらび・ぜんまいこぎ 荒起し 屋根普請 なすび床・麻まき 夜なべ終わり 昼ね始め
5	5	たんご	くれがえし
	10	花まつり とおかまち さびらき（田植え始め）	あらしろ ほとり刈り あぜぬり 大豆植付 中ずき 植じろ 田植え
6	21	しろみて（田植え終わり） すねほし どろおとし ごうたんや 夏法座（麦法座）	はだうえ（豆植付） 茶摘み りゅうきゅういも植付 麦刈り 田の草とり（一番草） 田ばやし（共同で苗代田植え） 小豆・からし播（山畑）

月	日	行 事	仕 事
7	2 10	はんげ祭り（庭ばやし） とおかまち ちゅう（夏至） うしの日	田の草取り（二番草） 芝草刈り 山畑刈り 干草刈り 天神祭
	25	天神さん（天神祭） 土用干し	
8	1	ついたちみち（道そうじ）	麻取り（麻蒸し）
	7	なぬかあび	田の水はずし（早稲）
	10	ほうこうにんのでがわり	墓そうじ
	13	盆	山畑焼き・そば播き 大根播き ひょうもうけ（男） あぜ草とり はでのかずら切り こうら引き わせつき 昼ね終わり（秋彼岸） 夜なべ仕事
9	1	はっさく	れんげ播き
	9 24	二百十日 はつぐんち（小国祭） 波佐祭（千本傘） 彼岸法座	稲刈り
10		いのこ（旧初亥日） かまいわい 柚根祭 大社祭	栗ひろい 麦播き なばとり そば刈り
	14		
11	7	ふいごまつり 大明神祭 後山祭	吊し柿作り 山いも掘り 楮蒸し 年貢おさめ 焚き木ごしらえ
	19	えびすこう	
	23	だししこ（大工さんの集り）	
	28	おたんや 大井谷祭	
	30	かわのあし ほんこう・ほこりおとし	
12	10	はしいわい ほうこうにんのでがわり とうじ すすはき すりこがくし もちつき さいまつ おおつもごり	茅刈り 堆肥負い（だいごえおい） 紙漉き ふいずま（冬かこい）
	23		
	28		
	31		

紙漉き農家の図面 ①

(図 1) 表住い



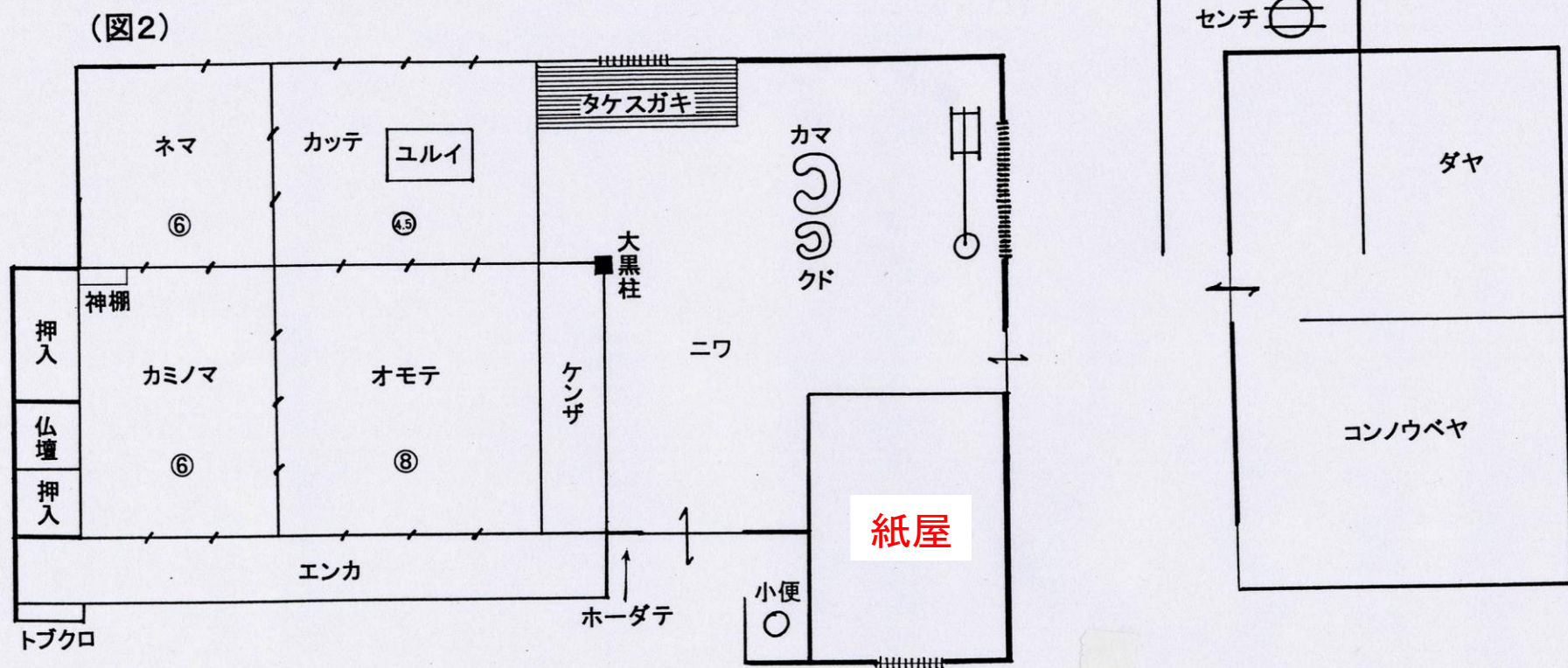
積雪地は、母家に牛馬が同居していた。



母屋と納屋のある風景

紙漉き農家の図面 ②

「カッテ住まい」



住居と作業する部分が半々である。積雪量の少ない地方は、牛馬は離れにある。



農家の母屋

紙漉き工程と用具の一覧①

紙漉き工程	使用する用具	参 考
1 楮の伐採	鎌	○田の岸、楮畑にて伐採する。(11月中旬より)
2 楮蒸し	平釜・楮こしき・組手・へこ・いい縄・押切り・こしき縄・滑車・こしき引綱・窯火箸・窯十能	○ニワと呼ばれる土間で一日五釜蒸す。 ○田植組で共同作業を行う。 ○一釜蒸す毎に食事を取る。
3 皮剥ぎ		○イロリ端で行う。 ○「黒皮剥ぎ」という剥ぎ方をする。
4 荒皮の乾燥		○最初の乾燥はハデ場、途中、「めどり返し」を行い軒下で干す。
5 楮こすり	楮こすり包丁・楮こすり台	○楮こすりの前夜荒皮を一晩水に漬す。
6 雪上晒し		○こすった後、甘皮の青味が残るので雪の上で晒す。
7 灰汁取り	灰たれこしき(良い灰は重たいイロリの木灰を用いる)	○(略図1)を参照のこと。 ○煮え湯を入れて木灰を沸騰させるのがコツである。
8 煮熟	柄杓(木)・平釜(または羽釜)・すくい棒・竹すがき	○水8対2の割合で4～5時間白皮を入れて煮る。

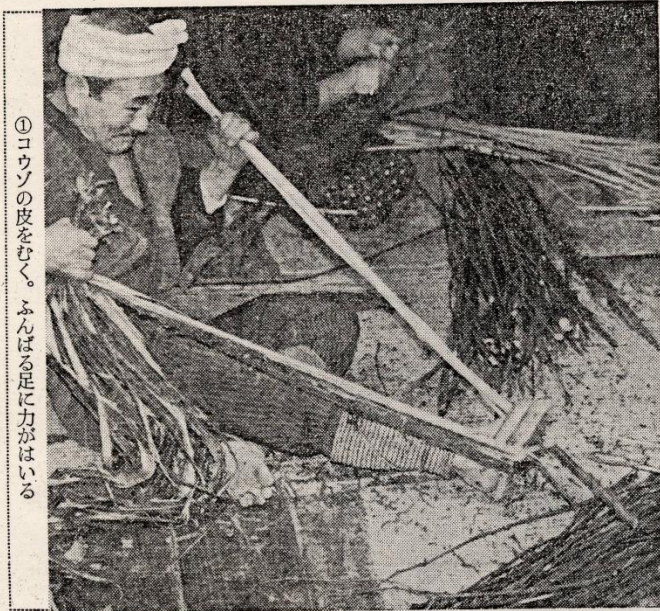
紙漉き工程と用具の一覧②

9 灰汁洗い	竹ぞうけ	○灰汁で赤くなった繊維を元の白さになるまで洗い落とす。
10 叩解	紙打ち板・紙叩き棒	○2人～4人で向かい合い調子を揃えて叩く。 ○打ち返しを数回行う。
11 塵取り	紙洗いぞうけ	○チリを取り良質の紙を漉く。紙洗いぞうけは目が細く叩解された繊維は漏れない。
12 トロロ叩き	トロロ桶・トロロ叩き槌・トロロまぜ棒・木綿袋	○紙漉きの繋ぎ材としてトロロアオイの根を叩き、桶に水を入れて置くと粘液が出る。
13 抄造 (紙漉き)	紙漉き船・ザブリ・まぜ棒・渡し棒・漉枠・漉簀・受簀・押板	○船に半分程度水を張り紙料を入れてよくまぜて、トロロをいれ再びよく攪拌する。 ○漉いた紙は受床に移し一日分を積み重ねる。
14 乾燥	紙板・乾燥簀	○湿紙は一晩はね木に掛けて脱水し、翌朝紙板に貼付け、天日乾燥する。 ○雨天はイロリ端で干す。
15 仕上げ	仕立台・甲石(こうじゃく)・紙切り鎌	○乾燥した紙を一束分(200枚)重ね仕立台の上に甲石(定規板)を当て紙切り鎌を用いて半紙に仕立る。

実践民俗学提唱 第1弾 「紙漉き習俗」再現

1971年12月
～1972年2月

昭和47年(1972年)4月22日 土曜日 享貞 日 楽庁 屋



①コウソの皮をむく。ふんばる足に力がいいる

石州半紙手づくりの記録

明治の姿を8ミリに再現

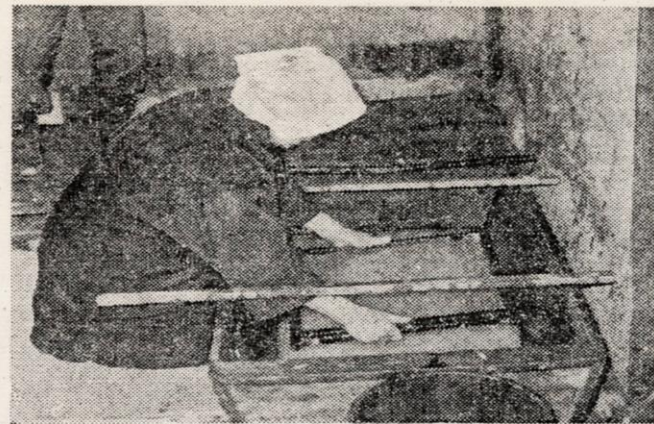
石州半紙。その紙すき技術を記録に残す
うーと部賀見金城町波佐の西中国山地民具
を守る会(二町会会報)は、百十古の紙す
き器具を集めたほか、この民具「紙漉り」の
すべてを記録し、ここに記録した。
山村の半紙は、十一月には、それが降
る。この季節から紙漉りをする。コウソを
かる。皮をむく。切つておく。くすね
る。直保八、十、はのかあ上にへもで
そのせ、東にコウソをさる。くすね
よう、つなわあだ」(二)である。
むしたあ、紙をさる。くすね、くすねで干
す。乾燥した「紙」を用いて「現役」と
呼ぶ。外皮をむく。くすね、くすね、くすね
きたたいて、もう一度洗い「すき世」に
れ、おや割のすしのような「すき」です
く。重をあげたあ、干板には五日干
し。一やうと半紙になる。
むしあげたあに「もあ」(二)「く」をか
こんの強い酒のシムもある。明中期の
様式で作業をしたのである。おや割の
シムがある。おや割にはなつたし。
波佐の民俗資料館には、紙すき民具をはじ
め七百五十八点の民具、道具、衣類などが
収蔵されているが、このフィルムもその一
部に使われている。

カメラ ルポ

(写真はすべて那賀郡金城町波佐で
西中国山地民具を守る会提供)

民俗資料の一部として





旧藩時代の紙すきを再現する小村さん

昭和47年
2月16日
(水曜日)
(第3種郵便物認可)

「一紙すき」の作業を撮影

金城 西中国山地民具を守る会

最も古い製法を再現

ハミと写真に収め後世に

紙すきの技術と習俗を記録として後世に残すため、那賀郡金城町渡佐にある「西中国山地民具を守る会」は、昨年十二月から旧藩時代の工法を再現して撮影を続けているが、十四、十五の両日、紙すきから乾燥までの作業を再現した。

この日行われたのは最も古い「一紙すき」で、明治二十年代まで続けられていたもの。紙ぶねの上にはフナがつけれ、当時の紙すき現物そのまま再現され、作業する人たちは昔の衣装をつけ、昔使われていた道具を使って作業した。

原料のコシンの繊維と下口を

混ぜた「紙料」が紙ぶねに入れられ、昔の紙すき技術を知っている近くの小村ワメさん（右）が「紙料」を使って紙ぶねのなかの紙料を取り出しては受け皿に乗せていく。

そして一枚ずつきかれた紙は板の上に乗せられ、圧縮して水分をとって乾燥させられ、これを板に張りつけ天日で乾燥させた。

同民具を守る会の田中正三さん（右）がハミカメラなどで撮影を続ける。会員や同町教育委員会の人たちはじっと作業を見守っている。民は大喜びだ。

旧津和野藩時代の紙漉きの形態を留める、この地方の紙漉きを忠実に再現し、科学的な薬品などは一切使用しない、紙漉き記録を作成した。

1972. 2. 16

楮





楮は、田んぼの石垣や
畦畔に植え付けられて
いた。毎年11月下旬頃
から楮の伐採が行われ
た。



楮の伐採



楮の運搬 ① 担ぐ



楮の運搬 ② 背負う



楮原木

楮木

こすり楮

楮の皮



漉簀と漉枰

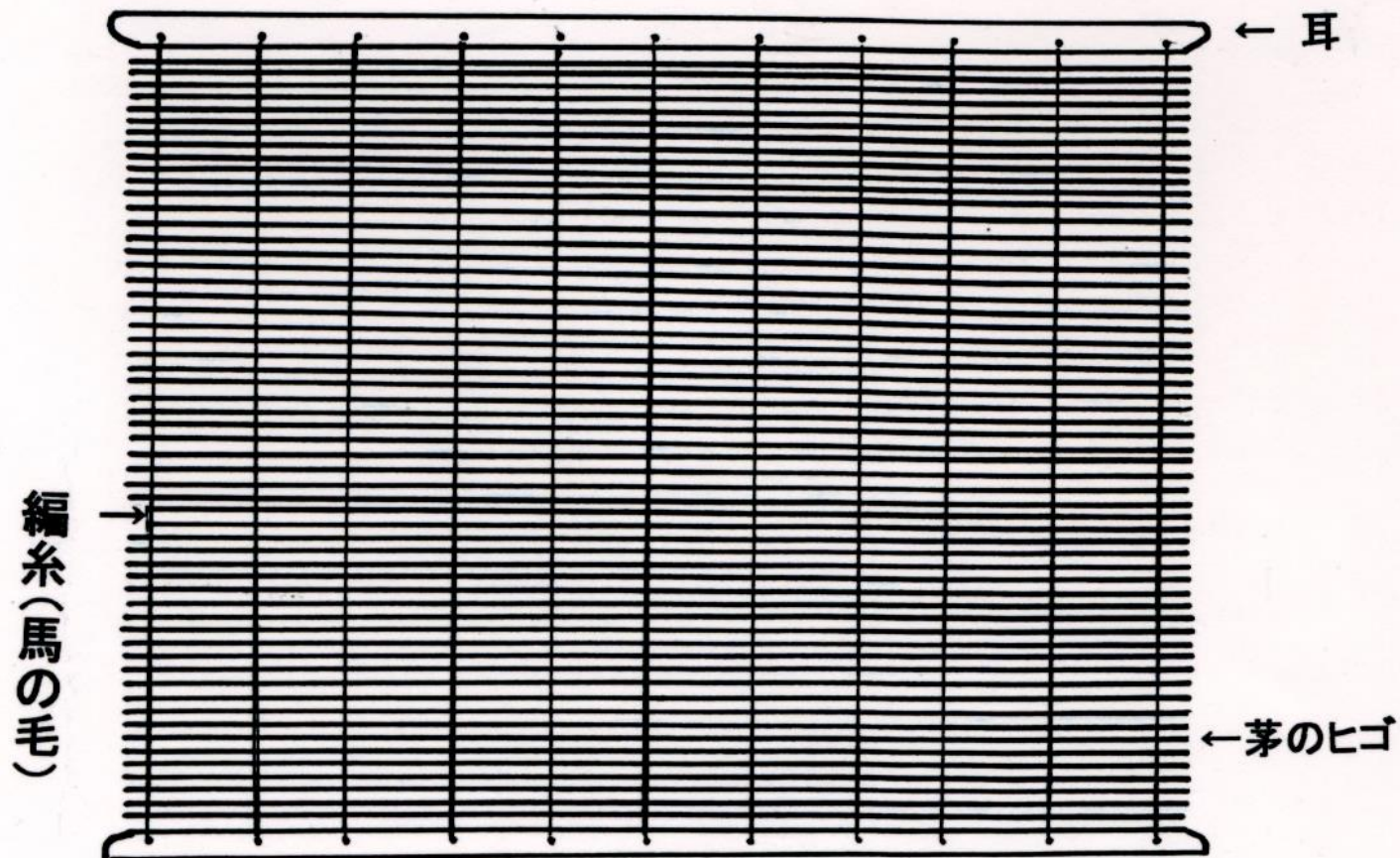


茅の芯を馬の尻毛で編んだもの



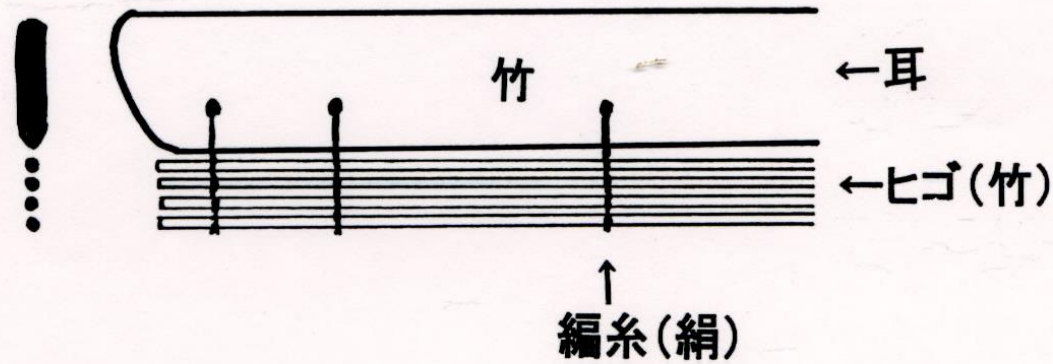
漉簀(すきず)

(略図3)漉 簀(一枚用)

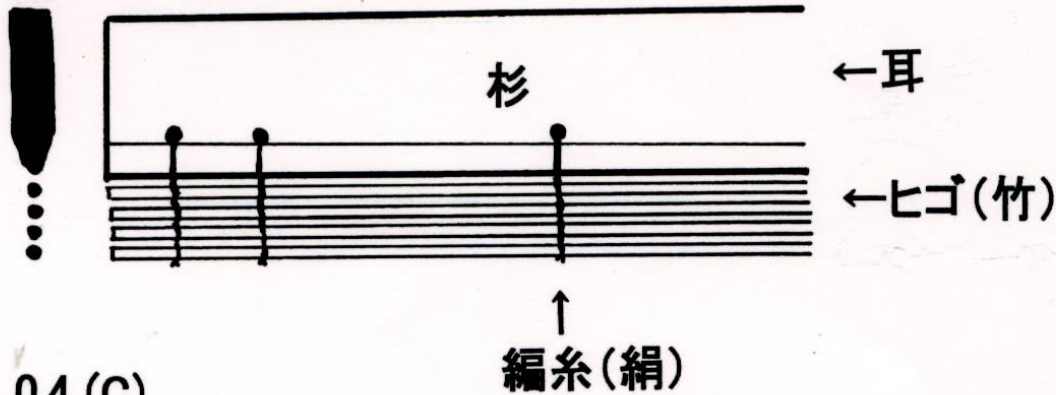


四枚用漉の耳の部分

0.3 (A)



0.5 (B)



0.4 (C)



お釜さん(カマドの神さま)



カマドの構築



カマドの大きさを確認する



カマドの壁付け



平釜を備え付ける



水を入れて水平を見る



上釜の仕上げをする



組手(くもで)を乗せる



屋根裏のこしき





こしき引綱を
結びつけて
いるところ。

カマドにお神酒を供える



お神酒を供えたところ



押切で楮を一定の長さに切る



4尺の長さに切り揃える



小束を集めて大束を作る



「へこ」を編む





棒を用いて
「いいなわ」
で絞める。



楮を乗せる前

大束にしている模様



水を補給して楮を立てる



「へこ」巻き





こしき引き綱で引き
あげると同時に、二
本の棒で挟み持ち
上げる。



実践民俗学提唱 第2弾 楮窯の移築展示

1972.12

釜焚き使用する道具



窯火箸

釜十能

楮こしきに用いる「へこ」



全長 9m



棒押し(楮蒸しの時の余興)

楮蒸しの合間に食べた食事

- 粉かき
- 粥
- 大根めし
- いり菜(大根の茎と葉っぱの油いため)
- 漬菜
- 味噌汁
- 上等の部類では楮蒸しの終了した晩に
- まぜ飯(大根をふいて油で炒り、かやくにする)
- おはぎ



「こしき」と「へこ」の
隙間を無くすために
二人でぶら下がる

蒸し終わったら
小束を取り出す



よく蒸みると1cm程度縮む



藁草履を履き楮の切り口を踏む



2～3本を片手に持つ



皮剥ぎの模様(黒皮剥ぎ)



白皮剥ぎ法 浜田藩

同かハを剥く図

図のごとく

手にもち

皮をむき

とるなり

中の真木

たきゝの外

用立なし

こんな子よ

むくなら

をらがやうニ

もってむけ

やあれ

そふないと

ひがし石見の

ごとすばむき

になるぞ

だあよをら

むひて

やらふか



2握りを1括りにする



剥いだ楮の皮





楮がら

楮がらは、囲炉裏
の焚きつけ、楮の
カガリ簀に使用さ
れた。

楮蒸しはユイ(講)で行い共に食事



食事にはドブロクは付き物



ハデ場で楮の荒皮干し



めどり返し



元結んだ箇所以外を結ぶ

メドリ返し



こうして乾燥させた荒楮は保存しておく

乾燥後の荒皮



小溝にて楮を浸たす



一昼夜水に浸す

浸した楮を藁草履で踏み鬼皮を取る



楮の水を切りソウケに入れる



ソウケに入れて楮を運ぶ



紙洗いぞうけ



いりり端で「楮こすり」をする



楮こすり(こすり台に草履を取付ける)



傷の箇所を丁寧に取り除く



擦り終えたものを束ねる



楮擦りを終えたもの



綺麗に擦さがれた楮の皮



楮こすり包丁



楮のこさぎカス



こすり楮の雪上での天日漂白



灰汁垂れ



直接灰汁を垂れる



灰汁とり

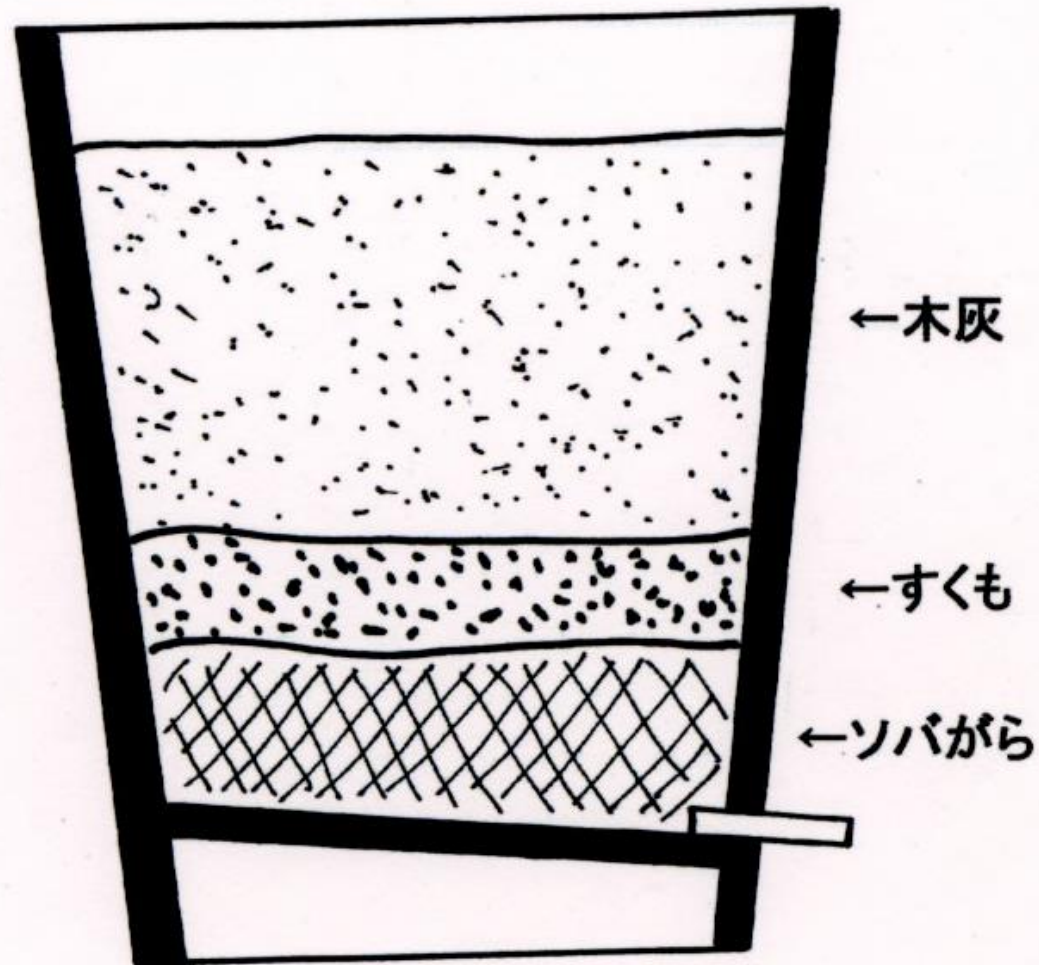


灰たれコシキ



こしき桶の底が水抜き口へ傾斜している

灰垂れコシキの断面図



蓋をして煮熟する



灰汁を汲む柄杓



灰汁で金物は錆びるので木の柄杓を用いる

煮熟したものを棒ですくい上げる



紙洗いソウケで灰汁を流し取る



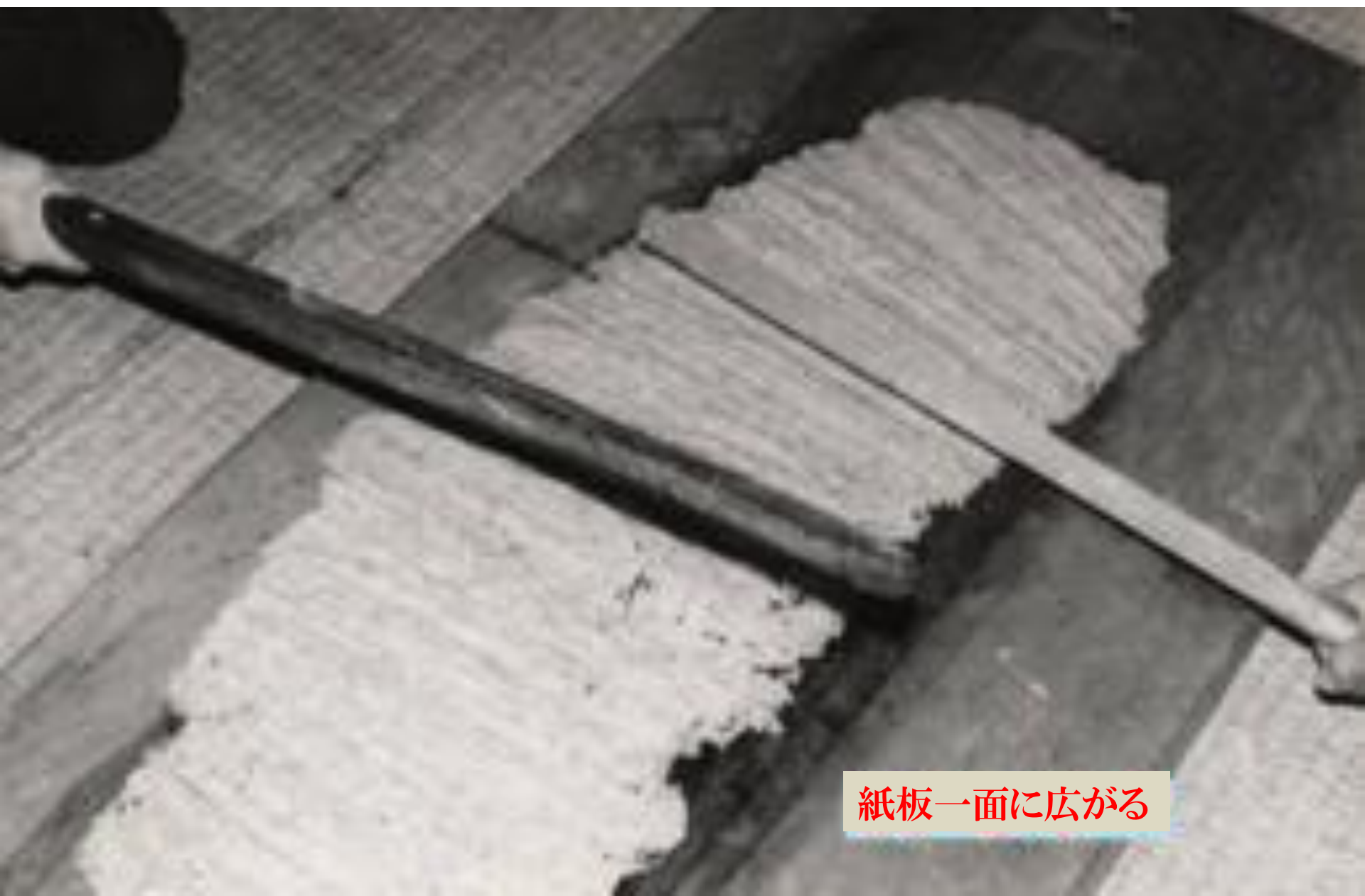
紙叩き棒



紙叩き(互いに紙板に向い合う)



4～5返し、叩き返す



紙板一面に広がる

打ち返すときに手水をうつ



紙料の「塵とり」と水洗い



トロロアオイ

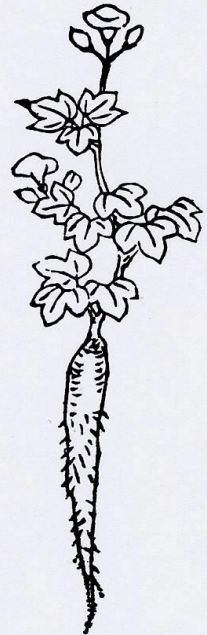
花しほるゝを引ぬき
五月入梅の間に干し
たくハふ也根の大きき
八分位長く牛房の
ごとし石原に出来る
ハ尺短し

売買銀一匁ニ

かけ目百二十目

安き時ハ一匁ニ

かけ目五百目



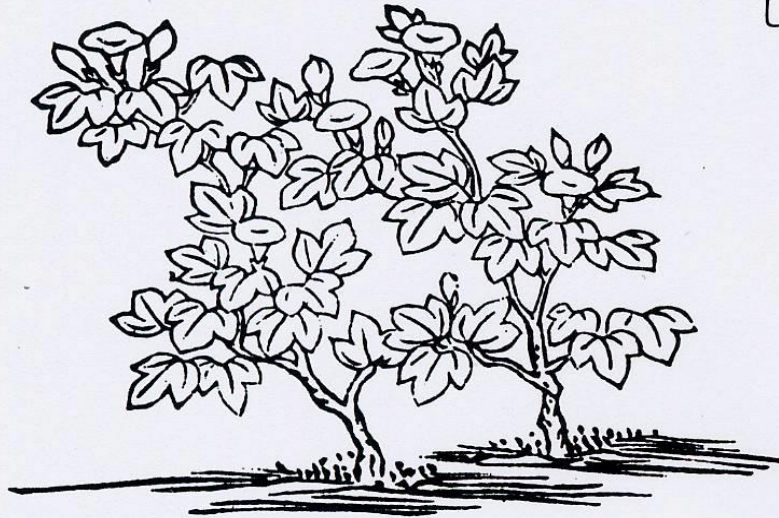
ひげ皮をこそげとり擲く
其製とろゝ汁のごとし
水をさし入るゝほどやハらか
に成としるべし猶かげん
あるべし
紙漉一船に一升ほど入と
心得べし
尤すいのうにてこし小桶ニ入
置入用程づゝつかふ

とろゝ草の種類

大豆小豆を作る
時候等し

春生じ花さく花の中に
実を生ずちいさく六角有
胡麻に似たり虱に似たり
花実用立なし根を用ゆ
左ニ図あり木の象綿木の
ごとし

山とろゝといふは作らず
自然に生ずるもあり
これを塵紙等漉に
用ゆ其紙いろ赤くなる
としるべし





トロロを叩く

乾燥したトロロアオイを一晩水に漬けて戻し、翌日、トロロ叩き槌でトロロを打ち砕き、水桶に一昼夜浸すとトロロの粘りが増す。

トロロ槌で叩き潰す



トロロ桶とまぜ棒



トロを口混ぜる



紙漉きの方法

- 溜め漉き法
- 流し漉き法

これらの二つの方法がある。
波佐地方は流し漉き法が用
いられていた。

楮^{そ、り}苧^た擲^たく^つ図

明日^{あす}紙^{すか}を漉^すんと思^{おも}ふとき
前^{ぜん}夜^やにそ、りをあらひ
翌^{よく}朝^{あさ}よりた、くに
朝^{あさ}飯^{はん}しかけ置^をき

にへる間^{あいだ}た、けばよし

冬^{ふゆ}紙^しはとろ、ばかり入^い
てた、くなり春^{はる}紙^しに

はのりを入^いる、もあり

左^{ひだり}なくて漉^すがたし

此^{この}音^{おと}遠^{とほ}くきこへていとど

物^{もの}さびしき山^{さん}家^か

身^みにしみぐと哀^{あわれ}也

擲^た台^{だい}板^{ばん}長^{なが}サ五^ご尺^{せき}幅^{はく}三^{さん}尺^{せき}余^{あまり}
厚^あサ三^{さん}寸^{すん}五^ご分^{ぶん}檜^{ひの}桧^{ぎの}桜^{おう}にて作^{つく}之^を

擲^た棒^{ぼう}之^の図^づ

長^{なが}サ

三^{さん}尺^{せき}先^{さき}ハ四^し角^{かく}元^{げん}ハ丸^{まる}し



浜田藩での 紙漉き法

其二

漉^すたる紙を

けたもろとも

左のけた持^もせにべし

もたせ^{しづ}平^へをたらし置^を

今^{いま}一ッのけたにて漉^す先の

持^もせ置^おしけたの紙を

うつし置又^{また}すきかくる

事^{こと}先^{さき}のごとし馴^なるゝに

随^{したが}ひ至^し極^{ごく}早^{はや}きもの也

紙^しくさ少^{すく}なく漉^すがた

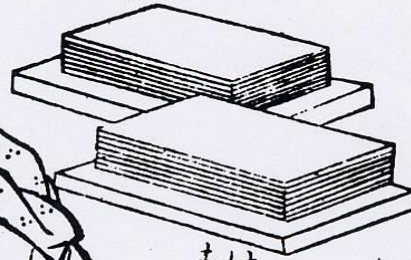
き時^{とき}ははじめの製^{せい}

のごとくすべし

すきたる紙

何枚^{まい}もかく

のごとく重^{かさ}ね



もけ
せた



箱^{はこ}間^ま半^{なか}ニ

一間^{いっかん}少し

せまし

手^てかつめたあ
けへめつたに
こがあらぬ
ものじや

一枚用の紙漉き船に水を張る



紙漉き船に紙料を入れる



練り材としてトロロを入れる



トロロを木綿袋に入れ絞る



紙料とトロロをよく攪拌する



漉枠にセットする



漉枰を両手で握り正座して漉く



一枚漉きは正座して漉く



漉き終えて水を切っているところ





紙屋(かみや)

漉いた紙の耳を折る





紙屋には明かり
とりの格子戸が
設けられていた。
暗くなればランプ
をともした。

竹の敷簀



藁の受簀



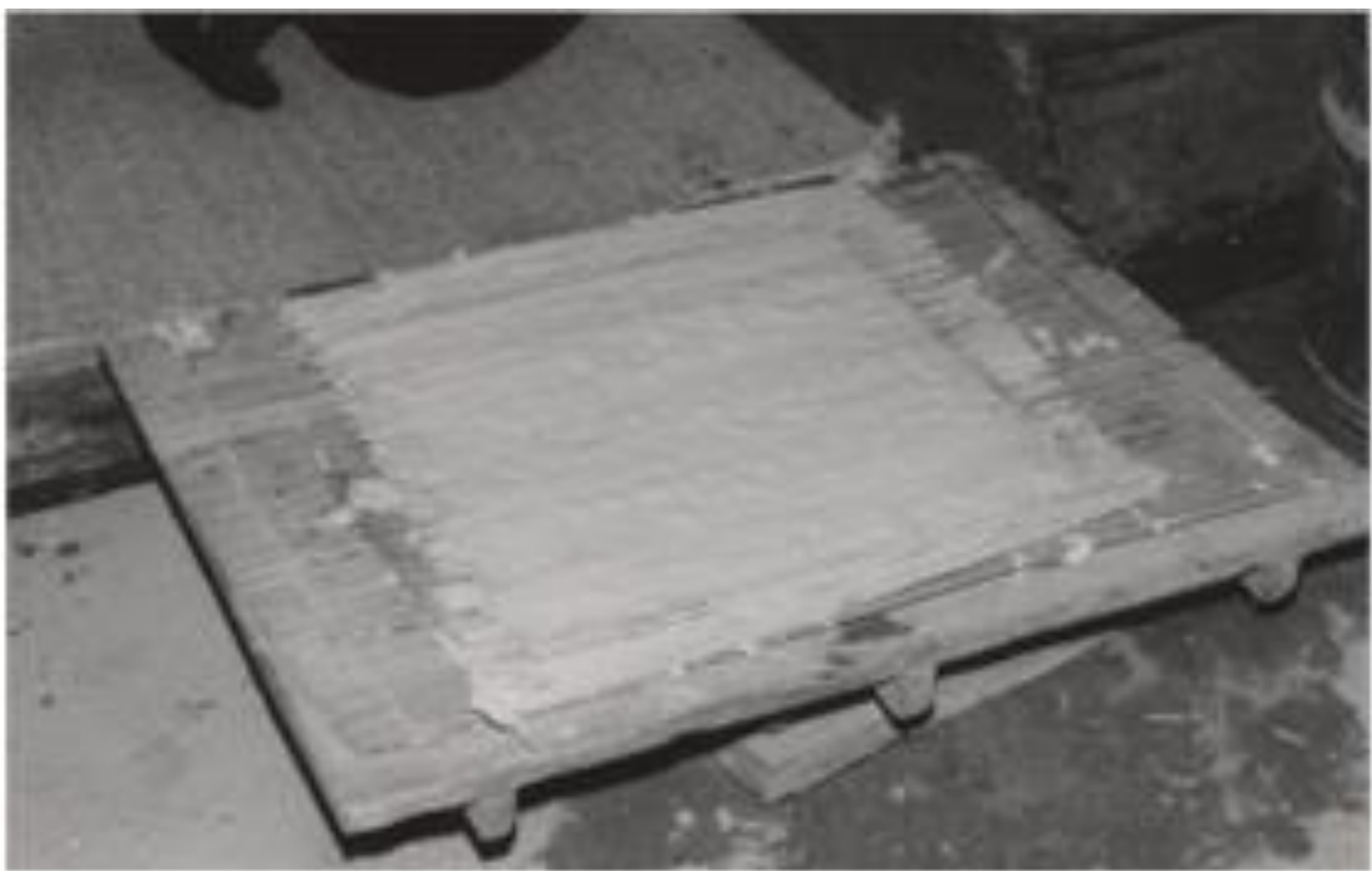


床に移す

漉簀を剥ぎとる



この状態で一日分を漉き重ねていく



漉き終わったら敷簀を載せる



押板を載せる



漉き紙の脱水時の断面図





石を載せて脱水

一気に脱水すると漉紙が流れるので、川石を一個ずつ足していく。

漉紙の板乾し

漉紙を一昼夜脱水が終わると、翌日は紙板に張り付けて天日乾燥させる。

天候が悪いと、屋内の囲炉裏端で乾燥させる。この為に、囲炉裏は長方形に造られている。

天日乾燥の方が紙の仕上がりも白く良い製品ができた。

紙板は40枚用意して、両面に10枚ずつ貼り付けた。

実践民俗学提唱 第3弾
囲炉裏の間移築展示
1973.3



脱水した紙は一枚ずつ剥ぎとる



楮がらに耳の部分を貼付け移動



紙板に張り付け天日乾燥する



紙箒(かみぼうき)



紙切り包丁



紙切り鎌



半紙裁ち法

半紙裁切図

半紙一折二十枚づゝに間へ
藁を入十折都にては是を一束と云
右の紙を台木へのせ角の
寸法極めし定規をあて
右の足にて踏付左の手に
鎌を持てこれをたち切也
是を十かさね一べとして
六べ合せ一丸と成し
御上納あるひは売紙にも
出すなり

左ニ各図を以て
其苦をしらす



半紙仕立台





新判
紙の繊維が粗く、手触りがざらざらしている。

紙の繊維が細く、手触りが滑らかである。

紙の繊維が粗く、手触りがざらざらしている。

甲石(半紙定規板)
左:旧判、右:新判

紙の繊維が粗く、手触りがざらざらしている。

甲石(半紙定規板)

仕立法

半紙仕立る^{し たつ づ}図

さんよ

紙かいが

かうも

しれぬさうし

がミで

まどを

はれ

この紙ハよい

かミじや

御見とりにも

はやう納る

ろう



大正初年の紙漉き用具代金

四枚漉きの用具代合計54円70銭を要した。

槽一式(受板3枚簀桁共)	8円
压榨装置	4円 50銭
仕立道具一式	2円 50銭
乾燥器鉄板(6枚張)	22円
箒	70銭
釜仕付(8寸)	10円
晒槽	2円
叩解道具その他	5円

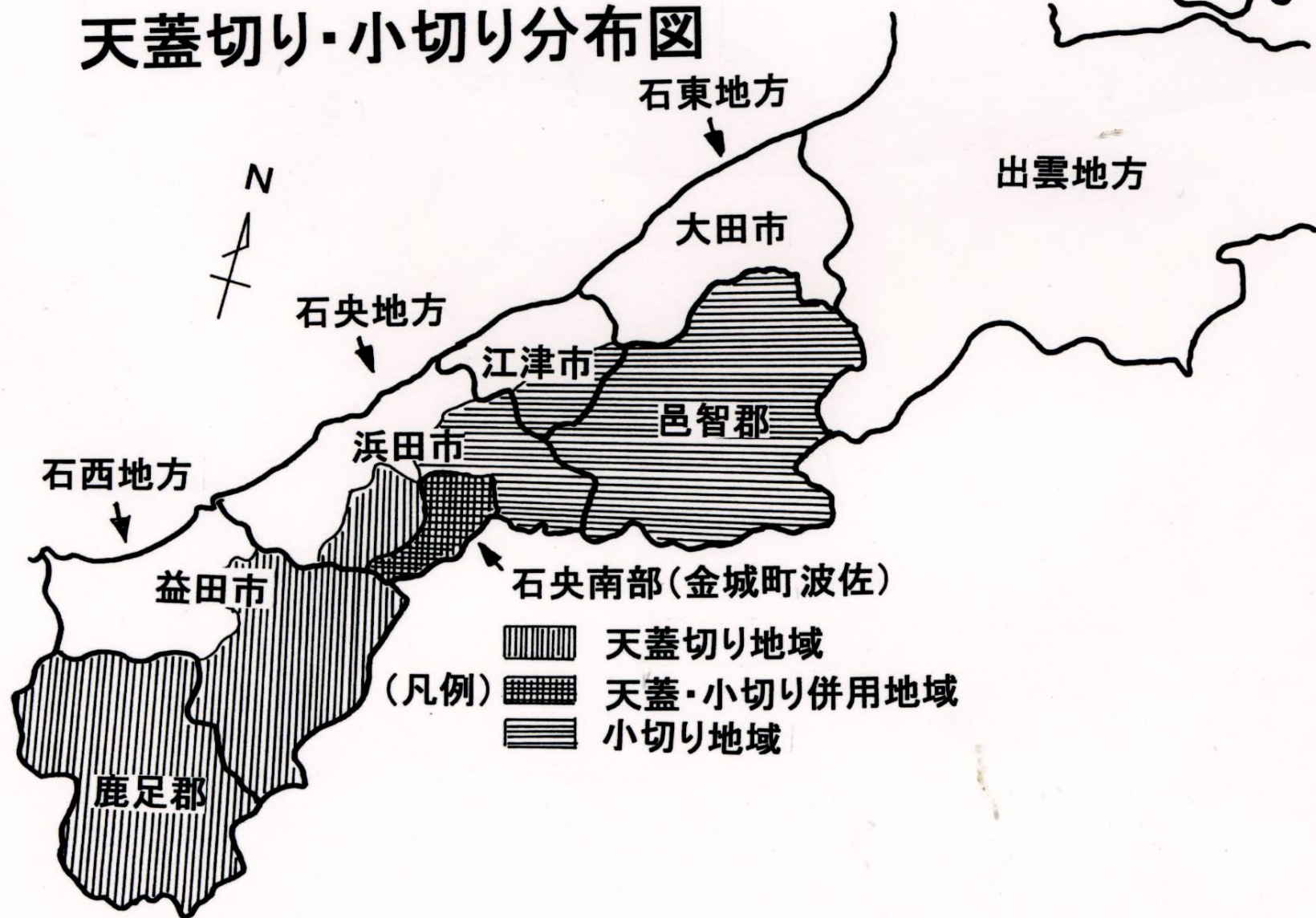
紙布の作り方

四枚漉きの和紙を六ミリ幅に切り、紙糸を作る。この方法は、2通りあり、**天蓋切り**、**小切り**という方法である。

天蓋切りは、石見西部の切り方で、小切りは、石見東部の切り方である。

波佐地方は、これらの接点に位置するため、療法の切り方が受け継がれてきた。

天蓋切り・小切り分布図



上下の耳紙は切り落とさないまま真半分に折つ

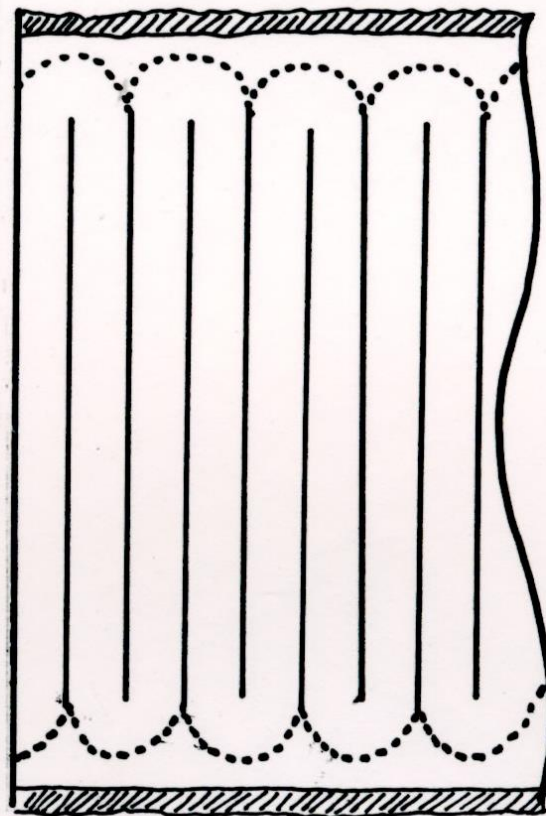
て紙切り鎌を用いて四ミリ幅に切る。または真

半分に折り、さらに三ツ折にしたものを紙切り

包丁で切ると、広げた時には実線のように切れ

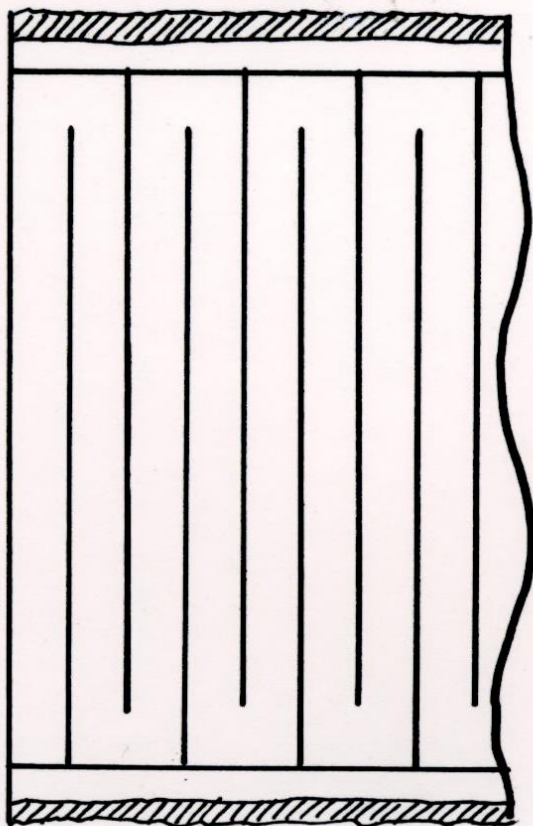
る。点線の所を指でちぎると長いひも状になる。

小 切 り



上下横の実線は切り落してから上下交互に紙切り鎌を用いて四ミリ幅に切る。

天蓋切り



「小切り」は、両端を指で交互に切る



「小切り」の両端をよま揉む



「小切り」の両端を千切る



「天蓋切り」は端をよく撚る



糸車に掛ける前に湿り水を与える



「小切り」を千切って室蓋へ入れる



糸車で紙糸を紡ぐ



出来上がった紙糸



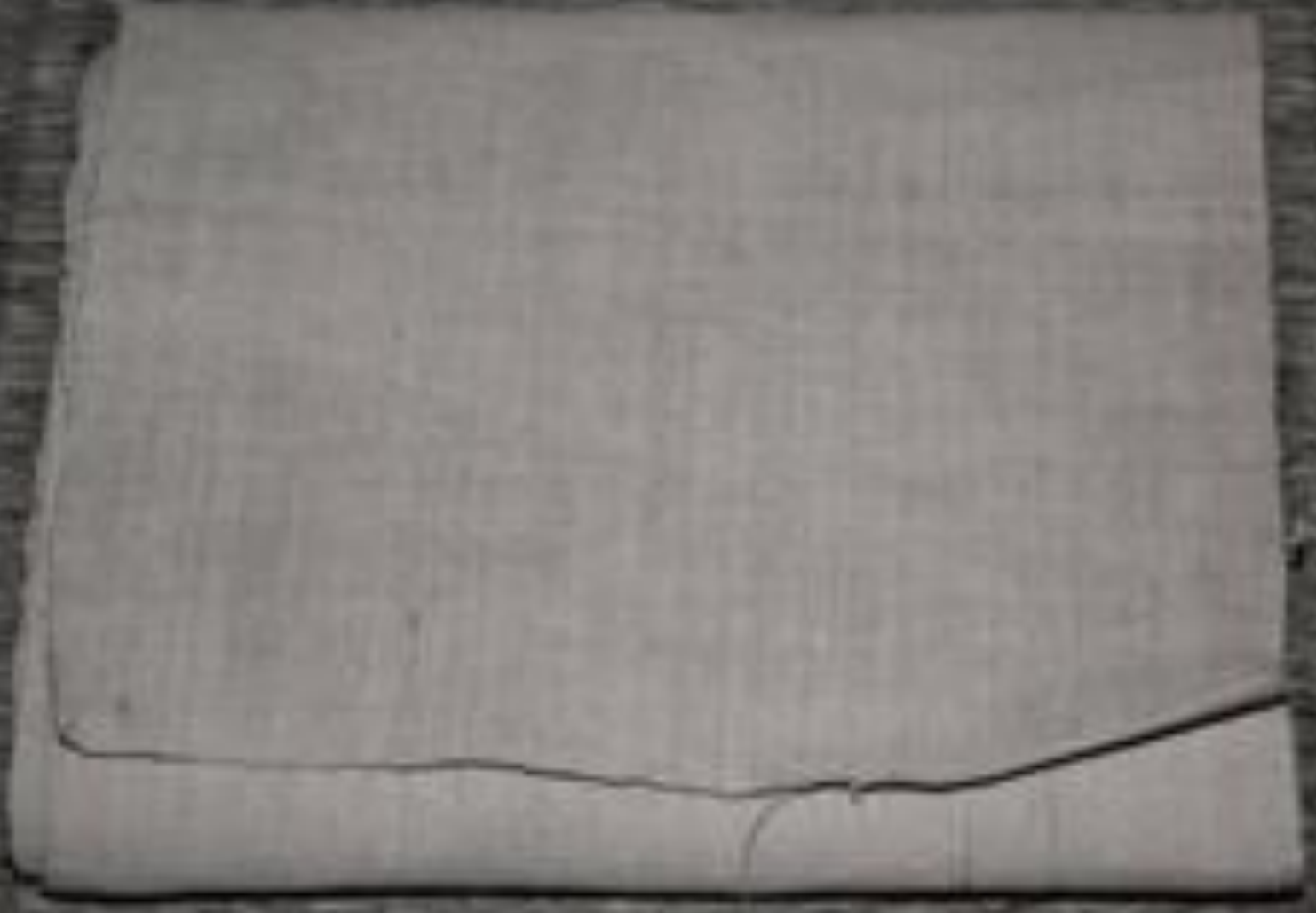
紙糸と紙布の反物



着物2着分を一度に織る

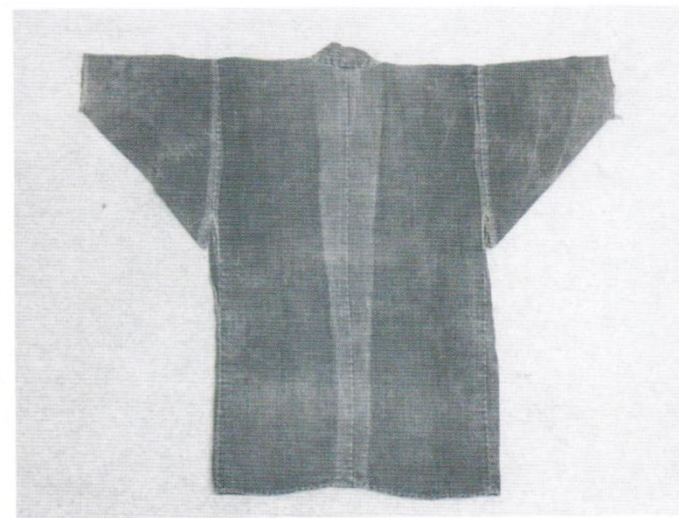


紙布(かみのの)





ジンベイ(紙布製)の着衣状況



コデナシ(紙布製)



ジンベイ(紙布製)

ジンベイ(紙布製)



ジンベイ(紙布・女性用)



コデナシ(紙布製)



田袴(紙布製・男性用)



田袴(紙布製・粉墨染め・女性用)



雪袴(紙布製)



雪袴 (紙布製)

鉄布団(てつぶとん・紙布製)



鉄布団(紙布製)⇒つづれ布団(外側はツヅレ織・中味は紙布)⇒緋布団(木綿)

鉄布団

カッコ(紙布製)



江戸時代の「紙負いこ」



【話 者】

紙漉き習俗聞き取り調査

氏 名	生 年	氏 名	生 年
小 林 為 三	明治28年	上 山 忠 一	明治34年
隅 田 ト モ	明治22年	半 田 ユ ウ	明治28年
古 和 文 男	明治28年	岩 田 シ ツ	明治34年
半 田 勘 市	明治25年	岡 本 惣太郎	明治18年
隅 田 与 一	明治14年	長 田 ユクヨ	明治29年
小 森 金三郎	明治25年	小 森 ハツノ	明治26年
飯 田 キ タ	明治22年	田 中 末 一	明治38年
田 中 テ イ	明治17年	田 中 ユクヨ	明治37年
笹 田 多五郎	明治33年	井 上 イ 子	明治22年

※ 楮蒸し・紙漉き作業で、ご協力をいただいた皆様(順不同、敬称略)

小林為三、小林ウメ、小林高四郎、小林幸子、幸田美子、田中茂子、小林重子、一町クミエ、一町仁市、岩田暦男、岡本弘三、上田房一、関本益夫、山岡憲真、塚本貞義、上山均、佐田達雄、上山信人、隅田正三、隅田哲夫、加納昭則、野田茂俊、内藤大拙、小金進。

【楮蒸し作業日】 昭和46年12月1日～12月8日(赤土運び、窯つき、楮伐採、楮蒸し、皮剥ぎ、楮めどり返し)

【紙漉き作業日】 昭和47年1月5日～2月15日(楮こすり、雪上晒し、灰汁採り、煮熟、紙叩き、紙漉き、脱水、紙板干し)



楮蒸し作業時の食事



1971. 12. 5

楮蒸し作業の後での記念写真

【紙漉きに関する論文】

「波佐の紙漉きと紙布づくり」

(隅田正三・1971年・「季刊文化財」島根県文化財愛護協会刊)

「紙漉き用具・習俗の比較から見た東西の変遷」

(隅田正三・1973年・「季刊文化財」島根県文化財愛護協会刊)

「石見山間部の紙漉き用具」

(隅田正三・1976年・「山陰民俗研究」山陰民俗学会刊)

「石見の紙布づくり」

(隅田正三・1980年・「染色と生活」第30号・染色と生活社刊)

「浜田・那賀の民俗調査から」

(隅田正三・1984年・「季刊文化財」島根県文化財愛護協会刊)

民俗小論文集「石見地方の紙漉き習俗」

(隅田正三・1989年・和紙の里産業組合刊)

「民具を用いた労働慣行」

(2007年・西中国山地民具を守る会編)

「波佐の山村生産用具 7 5 8 点」の内 紙漉き用具 1 1 0 点（国指定重要有形民俗文化財）



全国屈指の紙漉き資料館

実践民俗学提唱50年間の実績

- ①「旧製法による『紙漉き』の再現、記録作成」
(1971.12～1972.2)
- ②「楮カマド」の移設復元展示。(1972.12)
- ③「囲炉裏の間」の移設復元展示。(1973.3～4)
- ④「農具を用いた労働慣行」記録作成。(1975.5～11)
- ⑤「がしん俵」の稗栽培実験。(1976.5)
- ⑥「麻の栽培」と「麻蒸し」記録作成。(1977.5～8)
- ⑦「二丁フイゴたたら」の復元展示。(1978.10)
- ⑧ 早稲つき再現記録作成。(1981.10)
- ⑨ 古老による「トロヘイ」の復元、記録作成(1988.2)
- ⑩ 古代「たたら製鉄」の再現実験。(2009.12)(2010.3)
- ⑪ 「綿花の栽培」記録作成。(2016.5～11)

An aerial photograph of a rural village nestled in a valley. The foreground and middle ground are dominated by numerous rectangular rice paddies, many of which are filled with water, reflecting the sky. Several small clusters of traditional Japanese houses with tiled roofs are scattered throughout the landscape. The background consists of steep, densely forested hills. The overall scene is peaceful and scenic.

完

PPに使用した資料
『民具を用いた労働慣行』
国東治兵衛著『紙漉重宝記』